

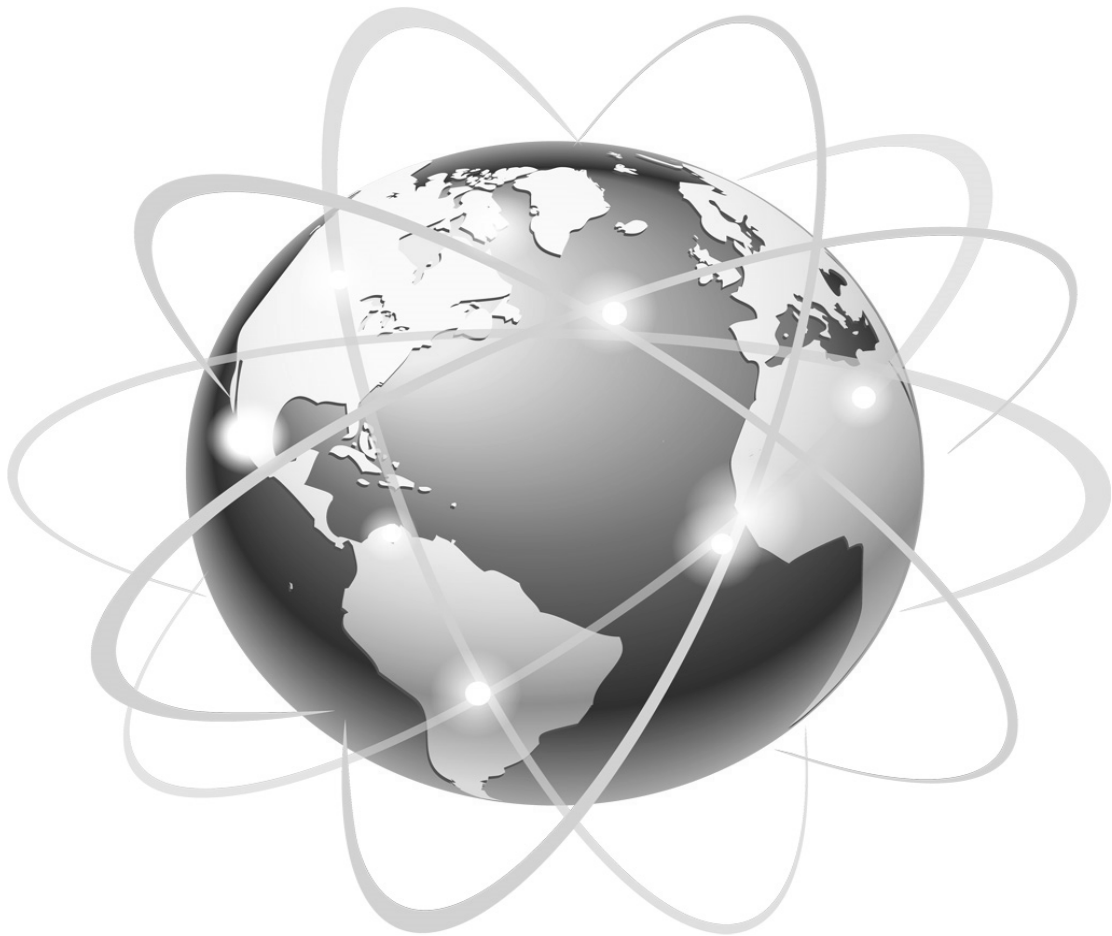
The 11th International Student Forum

on Peace Education

2022.2.24 ~ 3.3

Zoom

第11回国際学生フォーラム報告書



目次

巻頭言 (MESSAGE FROM FOUNDER)	2	
		森山 新 (Shin Moriyama)
概要・日程・参加者一覧 (FORUM SCHEDULE, PARTICIPANTS LIST)	4	
		森山 新 (Shin Moriyama)
基調講演 (KEYNOTE SPEECH)	6	
		森山 新 (Shin Moriyama)
学生レポート (REPORTS by OCHANOMIZU UNIVERSITY STUDENTS)	13	
		お茶の水女子大学参加学生
成果分析	28	
		森山 新 (Shin Moriyama)
編集後記	33	
		森山 新 (Shin Moriyama)
巻末資料 (MATERIALS)	34	
・基調講演 PPT		森山 新 (Shin Moriyama)
・お茶の水女子大学学生の発表 PPT		

巻頭言

森山新

2012年に開始された国際学生フォーラムは今年で第11回目を数えた。今回は前回に引き続き新型コロナ拡大の影響で、協定校であるアメリカ、ヴァッサー大学での実施が不可能となり、COIL事業の一貫という意味もあり、事前授業、フォーラムを含め全てオンラインで実施された。

COILはCollaborative Online International Learningの略で、大学の世界展開力強化事業として実施されている。本学は上智大、静岡県立大とともに2018年に採択された。日米の大学がオンラインでの共同の学びを積極的に活用し、留学や国際交流など、様々な国際的な学びの促進につなげようとする事業である。今回は事前学習で、ZOOMを大学対大学の交流や事前準備、講演会を含む事前学習に、FacebookやLINEなどのSNSを学生対学生の交流に活用した。

国境を超えて学生が交流し学ぶ国際共同学習は、短期間のセミナーやフォーラムとなることが多い。そこでは、短期間の直接交流で親睦を深め、その信頼の基盤の上に対話や討論を行い、成果をあげていくことになるが、そういったことは現実には容易なことではない。とりわけ今回は「平和教育を見つめ直す：第二次世界大戦と日米関係」という、日米間で異なる視点から捉えられてきたセンシティブなテーマが採択され、両者の意見や視点の対立を克服し、有効な結論を導き出すには、フォーラム実施以前からZOOMやSNSを積極的に活用し、オンラインで交流や親睦を深め、学び合う場を持つようにすることが必要である。それは、短期研修の短所を克服、長期化、日常化し、より大きな成果を上げることに繋がる。その意味で今回、COIL事業として全面オンラインで実施されたフォーラムの開催は、国境を越えた対話の場を日常的に提供する可能性を提示し、国際交流の可能性をこれまで以上に高めてくれたものと思っている。

また、通常の授業とは異なり、発表の事前準備、事前学習は、学生自らが相互に連絡を取り合い、オンライン上で会し、それぞれが自身に任された担当を主体的にこなしていかなければならない。しかもそれらは国境、言語の壁を越え、時差や学時歴の違いを克服し、実施しなければならない。その意味で学生の自律性、主体性が育まれ、グローバルなリーダーシップ育成につながる。

10月、本学とヴァッサー大で説明会を開催し参加者を募集、その後月1回のペースでオンライン合同授業を行い、フォーラムの事前準備、事前学習を行った。2～3月に実施されたフォーラム本番では、日米合同の4つのグループがそれぞれのテーマで発表を行ったが、その際には複言語主義の立場から互いに相手の言語（英語または日本語）を用いて発表した。どの学生の発表にも共通しているのは、第二次世界大戦というセンシティブなテーマを、自国中心の視点を保留、相手の意見に耳を傾け、対話する中で、超国家的な視点

から答えを導き出しており、そのような困難を伴うプロセスをこなす中で、超国家的な視点やアイデンティティ、さらにはリーダーシップを育んだということであり、各自が世界市民として成長していた。まさしく間文化的シティズンシップ教育の場としての国際学生フォーラムにふさわしい姿であった。

基調講演で私は、まず今回のテーマ「平和教育を見つめ直す：第二次世界大戦と日米関係」の趣旨説明を行った。さきの第二次世界大戦（太平洋戦争）は日米の国家的利害対立により引き起こされたものであり、平和教育には国家的な利害や視点の対立を克服する必要がある。しかし日米で行われている平和教育を見ると、日本では原爆、米国では真珠湾攻撃が強調され、それぞれが自国を被害者として描いており、真に国家的な視点を克服して行われているとは言い難い。そして、それを克服していくために、今回、「民主的文化のための能力 (Competences for Democratic Culture)」を理論的枠組みとして採択したことを説明し、その内容を改めて紹介した。「民主的文化のための能力」とは利害対立を抱える異なる他者との対話には、価値づけ、態度、スキル、知識と理解に関する 20 の能力の育成が重要であるという内容で、本フォーラムの文脈に合わせ、参加者がどのような能力を発揮する必要があるかを説明した。さらに高等教育機関で学ぶ大学生の使命を語った。Higher Education: A Critical Business の著者であるロナルド・バーネット (Ronald Barnett) によれば、高等教育とは、既存の知識、自己、世界をクリティカルに見つめ、問題を解決し、よりよい知識、自己、世界を構築する歩みの先頭に立つべき者の集まりである。日米の大学、日米のリベラルアーツカレッジを代表するヴァッサーと本学の学生により、そのような大学人のミッションにふさわしい発表と実践がなされたことは、このフォーラムを立ち上げ、長年にわたり続けてきた者としてもとても喜ばしいことであった。

世界はまさに今、ウクライナとロシアの対立に象徴されるように、第二次世界大戦以来の深刻な問題に直面している。ここで学んだ学生たちが、この深刻な問題を、自身が先頭に立ち解決すべきである、という意識に目覚め、世界がよりよく、ともに過ごせるようになるために立ち上がり、行動に移す。そしてそうした体験を踏まえ、さらにいっそう世界市民として成長していってくれることを祈ってやまない。

最後に、ヴァッサー大学の丘先生、土屋先生、講演を行なってくださった日米の先生方、そしてフォーラムの成功にご尽力くださった両校の国際業務関係者の皆様に心から感謝を申し上げたい。

フォーラム概要

日時 2022年2月24日(木)～3月3日(木)

場所 Zoom(お茶の水女子大学・ヴァッサー大学)

参加学生 お茶の水女子大学9名、ヴァッサー大学11名

主催 お茶の水女子大学国際教育センター・グローバル文化学環

授業日程(グローバル化と言語教育1:担当 森山新)

2021/10/7	9:00-10:30	説明会	お茶
2021/10/21	9:00-10:30	本フォーラムに参加する目的、姿勢、能力(森山)	お茶
2021/11/4	9:00-10:30	プレゼンテーション方法論(森山)	お茶
2021/11/18	9:00-10:30	第1回合同授業(各個人テーマ決定)、初顔合わせ	合同
2021/12/2	9:00-10:30	講演会1(Abhishek Nanaviti氏)	合同
2021/12/16	9:00-10:30	講演会2(小林誠氏)	お茶
2022/1/20	9:00-10:30	グループ別ミーティング	合同
2022/1/27	9:00-10:30	講演会4(金鍾成氏)	合同
2022/2/17	9:00-10:30	直前ミーティング	合同
2022/2/24	9:00-11:00	開会式(司会:アーノルド・あゆみ) 挨拶:土屋浩美、Joshua Rogers、Tomiko Morimoto West 基調講演:森山新	合同
2022/2/26	9:00-11:00	発表1「歴史教科書比較」 発表2「平和教育」	合同
2022/3/1	9:00-11:00	発表3「原爆・真珠湾」 発表4「戦争と人権」	合同
2022/3/3	9:00-11:00	特別講演(キャロル・グラック氏) グループ別討論・全体討論 閉会式(司会:アーノルド・あゆみ)	合同

参加者

お茶の水女子大学

氏名	所属	学年	グループ
		2	原爆・真珠湾イメージ変遷
		3	原爆・真珠湾イメージ変遷
		2	歴史教科書比較
		2	歴史教科書比較
		2	歴史教科書比較

		3	戦争と人権
		2	戦争と人権
		2	平和教育
		2	平和教育

ヴァッサー大学

氏名	所属	学年	グループ
		4	原爆・真珠湾イメージ変遷
		1	原爆・真珠湾イメージ変遷
		1	原爆・真珠湾イメージ変遷
		4	歴史教科書比較
		2	歴史教科書比較
		4	戦争と人権
		4	戦争と人権
		2	戦争と人権
		4	平和教育
		4	平和教育
		4	平和教育

スタッフ

氏名	大学	役職
森山 新	お茶の水女子大学	教員
Arnold あゆみ	お茶の水女子大学	TA
Dollase (土屋) 浩美	ヴァッサー大学	教員
Joshua Rogers	ヴァッサー大学	教員
Peipei Qiu	ヴァッサー大学	教員

講演会講師

氏名	大学	講演日
Abhishek Nanaviti	ジョージタウン大学	2021/12/2
小林 誠	お茶の水女子大学	2021/12/16
金 鍾成	広島大学	2022/1/27
Tomiko Morimoto West	ヴァッサー大学 (名誉講師)	2022/2/24
Gluck Carol	コロンビア大学	2022/3/3

Keynote speech

Reconsideration of Peace Education World War II and the relationship between the US and Japan

Shin Moriyama
(Ochanomizu University)

The relationship between the two universities

It is our great pleasure to hold the eleventh International Student Forum.

For a moment, I would like to review the relationship between our two universities.

Since the first meeting with Professor Qiu and Professor Tsuchiya in 2004, we continued to discuss academic exchange initiatives, and finally concluded an academic exchange agreement in 2006.

In 2009, we also launched joint international remote classes via a video conferencing system with Vassar students.

In 2012, the first International Student Forum was held on our campus. The forum then continued to be held every year and Vassar students always attended. In 2014, the forum was held for the first time outside of Japan, at Vassar College.

In 2018, our universities decided to promote COIL, Collaborative Online International Learning, and our interactions strengthened.

In 2019, we held the ninth forum at Vassar College, participants discussed the environmental issues from a global perspective. And last year, we conducted the tenth forum with Vassar College, we addressed COVID-19 as the theme.

The history of the International Student Forum

This forum was born in the aftermath of the sad, unforgettable disaster, the Great East Japan

基調講演

平和教育を見つめ直す ～第二次世界大戦と日米関係～

森山 新
(お茶の水女子大学)

両校の関係を振り返る

このように第11回国際学生フォーラムを開催できますことを、心からうれしく思っております。

ここでしばらく、両校の関係を振り返ってみましょう。

2004年、丘先生、土谷先生と初めて会い、学術交流について話し合いを続け、2006年に学術交流協定が結ばれました。

2009年からはテレビ会議システムを活用した国際合同遠隔授業が開始されました。

2012年には最初の国際学生フォーラムが本学で開催されました。国際学生フォーラムは毎年開かれ、ヴァッサーからも毎年学生が集いました。2014年には国際学生フォーラムがヴァッサーで開催されましたが、これは日本以外の海外で行われた最初のフォーラムとなりました。

2018年になると、両校はCOIL、すなわちオンライン国際協働教育のプログラムの参加大学に選定され、両国の交流は活発化されることになりました。

2019年には再びヴァッサーの地で環境問題をトピックに第9回国際学生フォーラムが開催されました。そして昨年は、まさにCOVID-19の最中にCOVID-19を取り上げ、それを克服すべく、第10回国際学生フォーラムはオンラインで開催されました。

国際学生フォーラムの歴史

これから始まる、この国際学生フォーラムは、10年前のあの、東日本大震災の悲しみから産声を上げました。当時日本

Earthquake that occurred on March 11, 2011. Everyone in Japan felt devastated by grief every day and night. However, support from all over the world encouraged us to pick up ourselves again. At the first forum, which was held in 2012, students from eight countries around the world gathered at Ochanomizu University, including two students from Vassar College. Participants from all over the world introduced to us a variety of support activities that were conducted in their countries for the reconstruction of Japan which moved us enormously. Vassar students, especially those learning Japanese, voluntarily held charity concerts for Japanese restoration. Three students sang a song titled "Kokoro no Koe," which means "voice of the heart." They also produced and presented to us a video, where many Vassar students were holding placards supporting the victims in Japan. I still keep this video and it always makes me feel the deep, heartwarming relationship between our universities. The first forum gathered not only from the U.S. but also from Thailand, Germany, the Czech Republic, and Poland, and people in their countries also held various charity events for us. Countries in East Asia, such as Korea and China, which usually have undesirable relations with Japan because of history, also extended special help to us at that time, and students from these countries introduced to us various supportive activities held in their countries. We listened to their presentations, sometimes with tears in our eyes, and got the power to live again thanks to their heartwarming support.

Because of this forum being borne of such a sorrowful disaster, it has dealt with a wide variety of worldwide problems. The forum has also discussed what we can do as a younger generation in the event of natural disaster or human-made calamity occurring anywhere on this planet, including nuclear power problems, environmental issues, refugees and immigrants, COVID-19, and how we overcome World War II and conflicts among nations. Each time the

は悲嘆にくれた毎日を過ごしていました。そのような中、全世界から応援と支援が、悲しみの最中にある日本に次々と寄せられ、我々は再度立ち上がろうという決意を固めました。2012年3月に開催された第1回国際学生フォーラムは、ここヴァッサーの学生を含め、世界8か国の学生たちが日本を訪れ、東日本大震災の惨状に対し、全世界でどのような支援の活動が展開されたかを紹介してくれました。ヴァッサー大学でも、日本語を学ぶ学生たちが中心になり、チャリティーコンサートが開催されました。ヴァッサーの学生たちが、「がんばれ日本」のメッセージを書いたプラカードを掲げながら歌う「心の声」の歌ごえは、今も私のPCに保存され、それを聞いたたびにヴァッサーの学生たちとの強い絆、熱い友情を感じることができました。このように日本の復興を叫ぶ応援は、学生たちの発表により、アメリカのみならず、タイ、ドイツ、チェコ、ポーランド、中国、韓国など、世界各地で行われていたことを知りました。特に日頃対立の絶えなかった韓国、中国など、東アジア各国からも、この時とばかりに過去を乗り越え、支援の輪が広がっていきました。このような全世界で展開されている支援活動に対する発表を聴きながら、日本の私たちは涙し、勇気づけられ、このように応援してくれる世界の人々とともに、我々も立ち上がろうと誓いました。

このようにして悲しみの中に始まった国際学生フォーラムは、東日本大震災を超えて、世界の自然災害、人的災害が引き起こされた時、我々若者は何ができるのかを、話し合い、提案し、実践する場として成長していきました。これまで話し合われたトピックは、原子力発電などのエネルギー問題、移民・難民問題、第二次世界大戦の克服、東アジアの共生、環境問題など、グローバル時代の今日に引き起こされる重要な問題を話し合ってきました。その度に、学生たちは住む場

participating students sincerely discussed these serious issues, they began to work toward overcoming differences in nationality, language and value in hopes of reaching the same goals for world peace. They also considered what they can do as young people and moved to action vigorously.

And now, we are able to hold the eleventh forum.

World War II and Education and Declaration of Peace in Japan

As you know, during the previous century, we human beings experienced world wars twice and created various sacrifices and sorrows. We deeply reflected on them and decided never to repeat such a tragedy again; we established international institutions, such as the United Nations and the European Union to overcome conflicts between nations. In 1982, the UN established 1986 as the International Year of Peace, which was the fortieth anniversary since the UN was built. After that, countries all over the world started various kinds of peace education.

Shinjuku, where I'm living, also announced the Declaration of Peace in that year. This is the declaration.

Perpetual peace in the world is a common wish of all humankind. As the only citizens in the world to be hit by nuclear bombs, and as residents who had experienced serious war damage, we have a responsibility to appeal to everyone in the world about how devastating wars are, to build eternal peace, and to hand over a planet rich in nature to the next generation. In the year of international peace, we appeal to all countries in the whole world for the abolition of nuclear weapons, which pose serious threats to the survival of humankind, to sincerely seek the realization of permanent peace in the world, and to declare Shinjuku a city of peace.

What do you feel when you read this

所、話す言語、考え方は違えども、同じように世界の平和を願い、何をすべきか、何ができるかを真剣に考える友の存在を知り、彼らとともになら、たとえ我々のような若者でも、できることがある、しなければならぬことがあることを知り、行動に移して行きました。

そして私たちは、第11回フォーラム開催に漕ぎ着けました。

第二次世界大戦と日本の平和教育・平和宣言

ご存知のように、前世紀、私たち人類は二度の世界大戦を経験し、多大な犠牲と多くの悲しみを生んでしまいました。その教訓から、世界は二度と戦争を繰り返すまいと、国際連合やEUの設立など、国家の対立を克服するための様々な国際機構が構築されてきました。また、国連では1982年、国連創立40周年にあたる1986年を国際平和年と定め、それを契機に世界は平和構築、平和維持のための教育がさらに推進されるようになりました。

私の住む新宿区でもこれを契機に「新宿平和都市宣言」を発表しました。以下がその内容です。

世界の恒久平和は、人類共通の願いである。私たちは、世界で唯一の核被爆国民として、自らも戦火を受けた都市の住民として、戦争の惨禍を人々に訴えるとともに、永遠の平和を築き、この緑の地球を、次の世代に引き継ぐ責務がある。国際平和年にあたり、私たちは、人類の生存に深刻な脅威をもたらす、すべての国の核兵器の廃絶を全世界に訴え、世界の恒久平和の実現を心から希求し、ここに新宿区が、平和都市であることを宣言する。

みなさんはこの宣言を読んで何を感じるでしょうか。私がこれを目にした時、何か違和感を感じずにはいられませんでした。もちろん、世界の恒久平和が人類共通の願いであることは言うまでもありませ

declaration? When I read it, I could not help but feel it was somewhat problematic and unacceptable. Needless to say, perpetual peace in the world is nothing more than a hope shared by all humans. However, the Japan that was described in this declaration was leaning toward portraying Japan as a victim, as in, "the only victim country in the world" and "a country seriously damaged in World War II".

Is Japan really able to maintain its status as a victim in front of countries around the world? I have visited Asian and Oceanian countries and regions, including South Korea, China, Taiwan, Singapore, Saipan, Hawaii and Australia, and witnessed a variety of scars inflicted by Japan's attacks during the war in most of them. Can Japanese people declare their victim status in front of the people there?

As you have already noticed, Japan was nothing other than an assailant country that invaded and colonized Asian and Pacific countries rather than a victim attacked by others.

Japan and the US once had a hostile relationship. We often think that the Pacific War began in 1941, initiated by the Japanese attack of Pearl Harbor. However, according to Professor Carol Gluck, who will give a lecture on the last day, it started much earlier than 1941, at least 1931, when Japan launched an attack on Manchuria, China. Moreover, we cannot understand why Japan caused those wars without going back further to the late 19th century, when Japan invaded China and Korea in earnest. In other words, Japan already initiated wars at that time.

If peace education in Japan continues to look away from the cause of the wars and history as an assailant and only to mention the damage in Hiroshima and Nagasaki, Japan's oath never to cause a war will not be believed by others around the world. People in Asian or Pacific countries, especially in countries victimized by Japanese colonization, would consider the pledge as deceptive. It would also be unpersuasive for those

ん。しかし、ここに描かれた日本は、「世界で唯一の被爆国」であり、「空爆などの戦火を受けた国」とされ、あたかも日本が被害国であるかのように描かれています。果たして日本は本当に世界を前に被害国であると言い切ることができるでしょうか。私は韓国や中国、台湾、シンガポール、サイパン、ハワイ、オーストラリアなど、アジア、太平洋の国々を訪れた経験がありますが、その多くの国や地域で、日本の加害の爪痕を見てきました。そうした国の人々を前に、このような宣言を堂々と口にすることができるでしょうか。

みなさんは既におわかりかと思いますが、日本は被害国である前に、アジア・太平洋を植民地化し、戦火に巻き込んだ加害国であったわけです。

日本とアメリカもかつては敵国の関係でした。太平洋戦争は1941年の真珠湾攻撃により始まったとされますが、今回最終日に講演をしてくださるキャロル・グラック先生は、この戦争の始まりは1941年ではなく、もっとそれ以前、少なくとも1931年の満州事変からだと言っています。さらに遡ると、日本が中国や朝鮮などへの侵略を本格化した1894年あたりからふりかえらないと、日本がなぜ戦争を引き起こすことになったのかを正しく理解することはできないと思います。つまりその頃から日本は世界に戦争を引き起こし始めていたわけです。

日本の平和教育がこうした戦争の原因や加害の歴史から目をそむけ、敗戦に至ったヒロシマ・ナガサキだけに目を向けている限り、日本が真に二度と戦争を引き起こさないという誓いは世界から信用を得ることはできないと思われま。植民地の被害者であるアジア・太平洋の国や地域の人々にはこうした平和宣言は欺瞞に聞こえるでしょう。

また、ヒロシマ・ナガサキに原爆を投下したアメリカに対しても、上の誓いは説得力を持つことはできないでしょう。このような平和教育や平和の誓いをしているよ

in the US, even though they should assume responsibility for dropping the atomic bombs on Hiroshima and Nagasaki. Furthermore, if Japan continues with such peace education and oath, it does not possess the right to lead the movement of abandoning nuclear weapons.

If we, not only those in Japan, but also those in the US, are to mention peace or to promote it, adopting the attitude to sincerely reflect on our past is indispensable. Japan should face its past of colonization and warfare sincerely. The United States also need to confront the fact of being the only country to use nuclear weapons. Additionally, if we are to contribute to world peace, we need to acquire various values, attitudes, skills, and knowledge.

Competence for Democratic Culture

A few years ago, the Reference Framework of Competence for Democratic Culture was established in Europe. This framework was built to provide various competences required to take action to protect and promote peace, human rights, democracy, and rule of law, to join democratic culture, and to peacefully live together in culturally diversified societies.

In this eleventh International Student Forum, I adopted this framework to develop participants' competence for democratic culture as much as possible, and to realize a discussion for peace between the two countries.

This framework proposes 20 kinds of competences in four categories related to democratic culture.

The first category is "values", including those pertaining to understanding the importance of concepts such as human rights, diversity, democracy, rule of law, and peace.

The second category is "attitudes", like those of openness, respect for others, possessing responsibility and civic mindedness, and tolerance of ambiguity for overcoming differences in opinion.

The third category is "skills", including

うでは、日本が世界の人々に核を放棄する平和運動の先頭に立とう、などと言う資格は持ち得ないと考えます。

我々が平和を語るには、平和を推進する先頭に立つためには、まずは自らを真摯に振り返る姿勢が必要です。日本は戦争と植民地化を引き起こした過去をまずは真摯に見つめる。アメリカもまた、世界で唯一、核兵器を使用した過去を真摯に見つめるところから始める必要があると思います。このように我々が真に平和の担い手になるには、様々な価値観や態度、スキル、知識が必要となります。

民主的文化のための能力

数年前、ヨーロッパで「民主的文化のための能力の参照枠 (Reference Framework of Competence for Democratic Culture: RFCDC)」が作られました。この RFCDC は、欧州市民が、平和や人権、民主主義、法の支配を擁護し促進するための対話や行動を起こしたり、民主的文化に参加したり、文化的に多様な社会で他者と共に平和に暮らす際に必要な様々な能力を提供することをめざしています。

今回の「第 11 回国際学生フォーラム」ではこの参照枠を活用することで、我々が民主的文化のための能力を最大限発揮し、平和のための話し合いが実現できると考えています。

この枠組みでは、我々が民主的文化のための能力として 4 つのカテゴリ、20 の能力を提示しています。

第一の「価値づけ」は、人権、多様性、民主主義、法の支配、そして平和など、民主的文化にとって必要な概念の重要性を理解する能力です。

第二の「態度」では、心を開き、相手に敬意を持ち、自らが責任感や当事者意識を持ち、忍耐強く対話を続け、達成する態度です。

autonomous learning skills, critical thinking skills, skills of listening to others, empathy, flexibility and adaptability, linguistic and communicative skills, and those of co-operation and conflict-resolution.

The fourth category, "knowledge and critical understanding" includes those of the self, language and communication, and various global topics.

I hope that all of you will develop into global citizens, utilizing these competences, becoming people of democratic culture, and resolving various worldwide conflicts and problems.

Our mission as higher education institution

In his book, Ronald Barnett discusses the role of higher education in our globalized era. According to him, to date, institutions of higher education have developed students' criticality in knowledge and have contributed to the creation of knowledge. However, in the globalized era, where wide variety of languages, cultures, and values coexist, the criticality in knowledge is not enough. It is also required that we develop a criticality that targets ourselves, as well as the world so we can move into action and create a desirable society. This means that by viewing the world critically, we can translate this into action and create a more desirable world. Higher education has this essential mission to develop these criticalities, and people living there must take the lead in this mission. In other words, we are given the extra time of four years to study how to achieve world peace and people's happiness. I hope all of you rack your brains, reflect on yourselves, aggressively pursue self re-creation and ways to re-create this world.

Later, when you grow older and recall this forum, I hope you will say, "Some of those dreams we created back then have come true because of the efforts that began at the conference.

During this forum, I expect each of you to

第三の「スキル」では、自ら進んで学び、クリティカルに考え、相手の声に耳を傾け共感し、言語スキルや柔軟な思考力を活用し、協力して問題を解決するスキルを指します。

第四の「知識とクリティカルな理解」では、自分に対し、言語やコミュニケーションに対し、トピックに関し、知識を得て、クリティカルに理解する能力です。

このフォーラムでこうした能力をフルに活用し、民主的文化の担い手となり、山積する世界の対立や諸問題を解決することのできる世界市民として成長して下さることを祈ってやみません。

高等教育機関に生きる私たちの使命

バーネットは彼の著書の中で、グローバル時代における高等教育の役割について述べています。それによれば、これまで高等教育機関はクリティカリティを育て、新たな知の創造に貢献してきた。しかし異なる言語、文化、価値観が共存し交錯するグローバル時代においては、単に知識に対するクリティカリティだけでは十分ではなく、自己に対するクリティカリティと、世界に対するクリティカリティとが必要である、と述べました。世界の現状をクリティカルに見つめ、より良い世界を実現するために行動していく。そのために高等教育機関である大学は、大学人は、その先頭に立つべきであると述べています。我々大学人はさらに4年間、考察する時間的余裕を与えられているわけですが、その与えられた時間は、世界の平和と幸福のために積極的に還元する義務があると思います。みなさんが知恵を絞り、自己を内省しつつ、既存の知恵と自己、そして世界に残された課題に果敢に取り組み、問題を解決していくことが望まれていると思います。

みなさんがのちに、少し大きくなって、今日のこの日を振り返った時に、ああ、あの時、日米の学生が世界市民がともに暮らすこのグローバルな問題について

learn and have meaningful discussions to achieve desired outcomes. I wish you many successes.

References

- Barnett, R. (1997). *Higher education: A critical business*. McGraw-Hill Education (UK).
- Barrett, M. D. (2016). *Competences for democratic culture: Living together as equals in culturally diverse democratic societies*. Council of Europe Publishing.
- 森山新(2021)「間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析 - 民主的文化のための能力の参照枠 (RFCDC) の観点から-」『人文科学研究』, 17, 25-38

で討論したおかげで、少しは住みやすい地球になった、そう思えるような、そんなフォーラムになればと思っています。

これから数日間、良き成果を残すフォーラムにさせていただけることを祈っています。みなさんの活躍を期待します。

References

- Barnett, R. (1997). *Higher education: A critical business*. McGraw-Hill Education (UK).
- Barrett, M. D. (2016). *Competences for democratic culture: Living together as equals in culturally diverse democratic societies*. Council of Europe Publishing.
- 森山新(2021)「間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析 - 民主的文化のための能力の参照枠 (RFCDC) の観点から-」『人文科学研究』, 17, 25-38

学生レポート

フォーラムにおける「民主的文化能力」の育成

1. 育成されたと思われる能力

フォーラムを通して自分自身が育成できたと思う能力として、まず文化的多様性に関する価値づけを挙げる。今までは、学校教育や日本のメディアを通して、日本側の視点からのみ第二次世界大戦について考えることが多く、日本の敗戦や原爆投下といった日本が受けた被害の面の印象を強く持っていた。しかし、今回のフォーラムではアメリカの学生と交流することで、第二次世界大戦をお互いの立場から考えることができ、一つの物事に対して多様な見方をするものの重要性を学んだ。具体的には、発表テーマを原爆と真珠湾攻撃とすることで、どちらか一方が被害者で一方が加害者であるという単純な構造で考えるのではなく、お互いどちらの立場も併せ持っていることを意識し、偏った視点での発表にならないようにした。発表準備の過程では、お互いが協力してできるだけ両国からの情報が揃うようにしたり、得た情報や考えたことを共有し自文化中心的なものになっていないか確認し合ったりすることで、ナショナリズム的な考えを克服し、国際的、間文化的視点を持てるように努力した。

次に、文化的他者性や他者の信条・世界観・実践に対する開放的態度も育成できたと考える。アメリカや中国出身の学生と交流することで相手が受けてきた教育や価値観に好奇心をより持つようになり、彼らの意見や発表を聞く中で他者の価値観やその形成過程を知りたいと積極的に思うようになった。また、他国出身の学生と交流する時間が増えたことで、異なる文化背景で育った人の意見を受け入れたり相手の生活文化に配慮したりする姿勢が身に付き、異なる文化的帰属や信念を持つ他者を尊重する態度を育むことができた。

今回のフォーラムではグループでの準備の時間が長かったことから、協働のスキルも育成することができたと考える。役割分担を適切に行ったり、お互いの発表資料を共有して日本語と英語を訂正し合ったり、効率的に準備が進むよう努力した。また、時差や学校のスケジュールが違うことなどから日程調整が難しい部分があったが、自ら積極的にミーティングが行えるよう働きかけることができた。他者への意見や質問なども、ミーティング外でもオンライン上で、以前よりも積極的に行えることができた。

2. 育成されたと考えられない能力

フォーラムを通し、残念ながらあまり育成できなかったと思われる能力は、言語・コミュニケーション・複言語に関するスキルである。オンライン上でのやり取りなどは英語を使い意思疎通がスムーズにいくよう気を付け、ミーティングなどでもなるべく英語で話すように努力した。しかし、英語と日本語を両方同程度話すことのできるメンバーに仲介者としての役割を頼ってしまい、自分自身が異なる言語話者とのコミュニケーションにおいて仲介者として行動することが出来なかった。適切なコミュニケーションを行うには、言語能力をもっと向上させる必要があると痛感した。

自己効力感も大幅に向上させることはできなかったと考える。第二次世界大戦というセンシティブな話題について日米の学生間で意見を交換し、様々なテーマで議論をすることができたことで対話の大切さを学べたが、先生方が企画してくださった授業に参加をしているという感覚が強く、自身の能力で世界を良い方向へ変革していけるという確信を持つまでには至ることができなかった。ロシアとウクライナの問題が起こったこともあり、学生間でも対話を続けていくことの大切さは強く感じられたものの、他国同士の衝突に関しては無力感を感じてしまうこともあった。

3. フォーラム全体の評価

様々な大学の教授の皆さんが講演してくださり、学生もいろいろな国にルーツを持つ人がいたことで、自身と異なる文化的帰属を持つ人々への態度が開放的になることに繋がったと考える。また、発表の準備段階は学生たちが資料集めやスライド作りまで全て行うことになっているので、自分たちで目標を決めたりタスクを考えたりすることで、自発的に自身のニーズに応じて自身の学習を追求、整理、評価する自立学習のスキルが育成された。他者と交流する機会や講演、違うグループの発表を通しては、他者の発言内容を偏った視点からではなく正しく理解しようとするリスニング・観察のスキルの育成にも繋がったと考える。

育成にあまり繋がらなかったこととしては、フォーラムに参加していた学生たちが元々偏った視点が少なく、両国に非があることや平和が大切であると認識している点で同じ考えを持っていたことから、自己効力感における障害を克服するという感覚を得にくかった。同様に、日米の学生が参加していたことから異なる視点からの考えや情報を得ることができ多様性を尊重することに繋がっ

た一方で、容易に意見が一致しないという状況が起きにくく、話し合いはスムーズに行えたものの解釈の不一致に対する寛容さは育ちにくかった。

「民主的文化能力」育成の場としてのフォーラムの可能性

1. 育成されたと思われる能力

本フォーラムでは、活動の前後で「民主的文化のための能力(RFCDC)」を共通の指標として用いることで、自身の能力やその育成について多くの発見を得た。そこで、特に大きな変化を感じた能力について、以下の3点から整理する。

1点目は、言語使用の側面での能力育成である。本フォーラムは日英バイリンガル環境で実施され、互いの言語をいかに用いて対話を行うかが重要な課題となった。そこで、どちらかの言語に依存するのではなく、やさしい日本語と英語を場面ごと(Zoom・SNS等)に使い分けることを意識した。これは、適切なコミュニケーションのために言語を駆使する積極的な態度であり、言語・コミュニケーション・複言語に関するスキル(C6)の実践に繋がった。さらに、教科書分析では、言語表現自体にナショナルナラティブが表れる可能性に配慮し、各言語に特有の表現は、そのまま相手に伝えることとした。この取組により、教科書という文字でのコミュニケーションにおける慣習に対し、その表現の背景や特有のスタイルまで考えようという意識が形成された。つまり、活動の中で言語の有する文化的意味に気づき、正しく理解しようとすることで言語・コミュニケーションに関する知識と批判的な理解(D2)の能力が育成されたと推測する。

2点目は、国際交流・協働学習による能力育成である。特に、開放的な態度(B1)を育成できたと考えている。フォーラムで繊細な話題を扱う上で、他者との間に真の信頼関係を築く必要があった。そこで、発表準備時間の他に、文化交流の時間を設け、メンバーが積極的に自己開示できる場を作ることを提案した。このような工夫により深い協働関係を構築することで、他者を配慮しつつも、センシティブな話題に臆せず積極的に臨むことができたと考える。また、この空間での率直な対話は、近年のSNS社会での閉鎖的かつ無秩序な言い合いとは異なる緊張感や責任感に基づいており、民主的に物事を解決しようとする価値観(A3)の形成に繋がったと考える。

3点目は、学問的学びによる能力育成である。本授業を通じて両国の態度を再考する中で、深い対話のためには、自国の態度を過去から現在、未来に向けて真摯に振り返る責任(B4)のある姿勢が重要だと痛感した。ここでの責任とは、個人の行動として自他を切り離す排他的なものではなく、自国を取り巻く課題を自分の課題として省察し、批判的に捉える態度を意味する。フォーラムでは、自国の視点から意見を求められる場面が多くあったため、私は自身の過去を振り返るとともに図書やインターネットなど様々な情報にアクセスすることで、公平な立場から説明することを心がけた。このように、意識的に自身の行動を振り返り、責任ある一市民としての具体的な行動変容を実践していく態度が能力の形成に繋がったのではないかと考える。

2. 育成されたと考えられない能力

フォーラムを通じ、民主的文化のための能力を意識することでその育成を目指してきたが、残念ながら達成できなかったと考える能力は、大きく2つある。

第一に、対立を解決するスキル(C8)である。発表に向けての活動では、両立場の衝突の原因となり得る問題点を提示することはできたが、対立を解決する最善な解決策を導き出すには至らなかった。本当の意味で、対立を解決するスキル(C8)を身につけるためには、その解決に繋がる実践可能なプログラムの提言を行う必要があったと考える。具体的な提言策定に至らなかった背景として、日米教科書の記述の比較方法の問題点が指摘できる。私たちは、自国の教科書を個々に調査し、各自の研究結果をミーティングで共有する研究方法をとった。これは、時間的、空間的制約があった本フォーラムにおいて効率的な方策であったが、すべての当事者の考えや感情を踏まえた分析という観点からは、不十分であったと考える。なぜならば、自他のもつバイアスの影響や記述の深部にある心理的葛藤を無視している可能性があるからである。そのため、教科書のPDF自体を共有する等の工夫により、各国の教科書の記述に対して、両者の視点から分析し、そこに表れる各人の心理的な衝突まで比較することが必要であったと考える。さらに、このような研究方法の工夫から、相互の視点の獲得を目指すことで、リスニング・観察スキル(C3)や共感(C4)などの他の能力のさらなる向上も目指すことができたと考える。

第二に、柔軟性・適応力(C5)である。フォーラムでの各グループの発表は示唆に富んでおり、研究活動における自身の観点の一面性を痛感した。これは、平和教育の多面性を示す一方、自身の考えに固執してしまい、新しい文脈に効果的かつ適切に対応する能力が欠如していたことを示すと考える。そこで、事前学習の段階で、他グループとの交流会を自主的に設置する等の他の意見を取り入れる工夫を改善策として挙げる。他グループとの共有により、多様な意見が集結するフォーラム

空間を活用した多角的かつ相補的な活動が実現でき、より深い対話へと繋げることができたのではないかと考える。

以上の2点は、どちらも研究過程での課題である。だからこそ、上記した視点を具現化するために、明確な理由をもって、順序立った研究方法を組み立てることを今後の私自身の課題とし、さらなる能力の向上に繋げていきたい。

3. フォーラム全体の評価

本フォーラムが能力育成に、特に、寄与していたと考える点を3点挙げる。

第一に、「平和教育」の文脈から RFCDC の応用可能性が提示された点である。RFCDC は、二度の大戦による悲劇を克服しようと、ヨーロッパが構築したものである。そのため、平和を題材とした本フォーラムでは、対話の随所で各能力を発揮する重要性を痛感した。さらに、この概念が日米学生という新たな空間へ順応していく過程を学生が実践を通じて学べる環境は、本能力がフォーラムに留まらない多様な場面で応用できることを提示し、次なる行動を促進する有意義な場であったと考える。

第二に、自己から他者へと広がる対話の段階が整備されていた点である。平和教育という他者との関連の中で広がりがあるテーマが設定されていたが、フォーラム自体は、自分自身の関心や経験を振り返ることから始まった。さらに、小グループでの研究からフォーラムでの意見交換というように、段階的にフィールドが広がる設計がされていた。そのため、自己と課題との関連を実感しながらも、少しずつ他者の視点を理解することができ、無理なく能力育成に向けた自他を尊重した活動に向かうことができたと考える。

第三に、事前学習やフォーラムでの講演で、第三者的視点も含めた幅広い知識が提供された点である。講演を通じて示された視点や切り口は、日米だけでなく、第三者の存在を含めた俯瞰的な分析の重要性を意識づけるものであった。これは、D 知識と批判的な理解を効果的に実践する場として各活動が機能していたことを示していると考えられる。

続いて、能力育成のためのより良い場となるために改善が必要だと考える点を整理する。

第一に、フォーラムでの成果が学生間で共有されておらず、その成果をいかに実生活に生かすかは個人の裁量によるという点である。確かに、1人1人が主体となり、フォーラムでの成果を具体的な行動へと繋げる自律性は民主的能力の育成を目指す上で重要な観点である。しかしながら、フォーラム内での学びを学生間で共有することで、自他の価値観の違いを踏まえた独りよがりでない示唆を得られることも事実である。だからこそ、フォーラムを通じて考えたことやさらに調査したことなどを個人のフィードバックを基に、さらに自由に対話する機会を設けることで、フォーラムを生かした具体的な行動を「とも」に起こすことが可能になるのではないかと考える。さらに、このような個人の学びの成果や実践を互いに発信し合う場から、「双方向性」のある市民意識の形成を目指せると考える。一方で、この取組によって、個人の主体的な行動及び自立学習スキル(C1)の育成を阻害する可能性にも留意し、その実践方法を検討する必要がある。

第二に、日米の学生間でいかに市民意識が形成されたのか包括的な理解が難しいという点である。RFCDC を共通の指標として用い、日米相互の学びの成果を共有することができた場合、本フォーラムを通じた能力の形成の過程をより詳細に理解することができる。例えば、立場が違えば、RFCDC が定めた様々な能力の機能の仕方も異なる可能性がある。また、フォーラムの延長線として、共通指標を用い、学生間で学びの成果を分析することで、双方にとってよりよい場の実現を目指すことも可能である。だからこそ、お茶大生が用いた Google フォームでの自己評価の対象を両大学の学生に広げる等、育成すべき能力に対して、より深く共通理解を図ることが今後の発展的な課題であると考えられる。

このように、本授業は、民主的文化のための能力の育成に大きく寄与すると共に、今後のより良い実践への大きな可能性をもっている素晴らしい場であったと振り返る。

「民主的文化能力」の観点からフォーラムを振り返って

1. 育成されたと思われる能力

このフォーラムは、民主的文化能力育成に大きく貢献したと考える。ここでは、その中でも特に大きく育成されたと思われる3つの能力について挙げる。1つ目が、「協働のスキル」だ。このフォーラムでは、日本とアメリカの学生で5人程度のグループを作り、一つの研究をし、その成果を発表した。私にとって、今までお茶大生以外の人と発表を作る機会は少なかったため、この形式は新鮮であった。今回のフォーラムでは、アメリカの学生は日本語を、日本の学生は英語を話すことができたが、それでもコミュニケーションが取りにくい、と感じてしまうことがあった。例えば、このフォーラムの準備期間にはクリスマスや年越しという時期があり、一時アメリカの学生と連絡が取れなくなってしまったこと、時差の影響などでミーティングのスケジュールを決めるのが難しかったこと、などがある。それでも、SNSを使って積極的にコミュニケーションを取ったり、会わなくても各自で研究ができるような計画を立てたりして、なんとか1つの発表を完成させることができた。自分と異なる文化圏や国に属する生徒と一緒に1つのものを作り上げたことで、協働のスキルは大いに高まったと感じるし、自信にも繋がった。

このフォーラムで育成されたと思われる能力の2つ目は、「自己に関する知識と批判的な理解」だ。このフォーラムでは、日米の共通の歴史である第二次世界大戦に関するさまざまなトピックを、日本、アメリカの立場から見ることができた。私は特に、発表準備の中でアメリカと日本の教科書の原爆に関する記述について研究した。別の授業で、原爆の開発に関わったアメリカ人が広島に訪れて、日本人と交流し、原爆について対話する、というドキュメンタリーを見たことがあった。日本を単純な原爆の被害者としか捉えられていなかった私には、そのアメリカ人の、原爆投下は正しい選択だった、ということを頑なに主張する態度がとても衝撃的で、憤りさえ覚えた。しかしこのフォーラムの発表準備を通じて、アメリカ・日本それぞれの戦争に対する考え方を知ることができたと同時に、日本の戦争に関する教育について研究することで、日本のどのような教育が日本人の戦争に対する強い被害者意識を育てているのか、ということがわかってきた。またアメリカの立場に立って戦争を見ると、日本の加害者性についても理解することができた。

このフォーラムで育成されたと思われる能力の3つ目は、「解釈の不一致に対する寛容さ」だ。以前の日韓フォーラムなどと比べると、今回のフォーラムでは日米の間の戦争に関する解釈の矛盾は小さいように感じられた。参加者はそれぞれ互いの言語を学習しており友好的であったということ、日米は国ぐるみで関係が良好であることなどが、おそらくその理由だろう。私のグループは戦争に関する教育について調べたが、その記述にも矛盾は見られなかった。ただ自分の国の加害者性を軽視してしまうなどの認識のずれは大きかったように思われる。この理由を理解する上では、特にキャロル先生の「戦時中か、もしくは終戦直後に(省略)各国の記憶の中で確立され、語り継がれるもの」(グラック, 2019, pp. 51-52)であり、「加害者と被害者、もしくは英雄と悪者があまりにはっきりしている」(同書, pp. 52)、「白黒物語」(同書, pp. 52)の概念が非常に役に立った。このフォーラムでは、まずどのような認識のずれがあるのか確認した上でそれが生じてしまう要因を探っていくことにより、それに対する寛容さをより向上させることができた。

このフォーラムで育成されたと思われる能力の4つ目は、「言語・コミュニケーション・複言語に関するスキル」だ。この能力に関しては、同じグループのアメリカの学生に、ロールモデルを見出した。その生徒は、不自由ながらも日本語を一生懸命使って、こちらとの意思疎通を図ってくれたり、他のアメリカの学生とのコミュニケーションを手伝ってくれたりした。「言語・コミュニケーション・複言語に関するスキル」が高い人とは、こういう人だと示してくれた気がする。スキル向上のための指針を見出したという意味で、このスキルを育成された能力の中にも含めたい。

2. 育成されたと考えられない能力

上記のように、このフォーラムではたくさんの民主的文化能力が育成されたが、残念ながら育成されなかった能力もある。それは、「自己効力感」だ。発表のために、私たちはアメリカ、日本の教育について研究した。その過程で、日本の教育では小さい頃から原爆について、その被害ばかりにフォーカスして学ぶことがわかった。私たちはこの教育方法が、日本人が戦争に関して被害者意識ばかりを強く持ってしまう、加害者意識が損失してしまうことの一因であると考えた。しかしこれに対して、私たちが今直接できることは、ほとんどないに等しい。また今回のフォーラムのように、戦争というセンシティブなトピックについて、日米間で話し合う機会を得られる生徒はごくわずかである。また、原爆による日本への被害の大きさを考えると、被害についての教育を疎かにするこ

ともできない。さらに、教育は人々の戦争に対する考え方を決定するための一つの要素にすぎない。このようなことを考えると、教育がどのように変わっていくべきか、またそのために私たちに何ができるかということは、簡単に答えを出すことのできる問題ではない。教育の方面に限らず、このフォーラムを通じて、戦争に対する日米間の認識のずれとはどのようなものなのか、それが生じる要因は何なのか、ということについてより詳しく調べたり知ったりしていくほど、その解決が難しいことや自分たちが無力であることが感じられてしまった。

3. フォーラム全体の評価

このフォーラムは、多方面で生徒の能力育成に寄与していたと思われる。最も能力育成に役立っていたと感じるのは、異なる国の生徒が1つのグループとして、センシティブなテーマに関する研究を成し遂げるといったフォーラムの形式だ。研究全体の結論を見出したり考察をしたりするためには、グループ内でそれぞれの研究成果を共有し、それについて話し合いを重ねていく必要がある。私たちのグループもそれぞれの国や地域の教科書を各自で調べた後、その比較を行ったり問題の解決案を見出したりするために、それぞれの国の教育制度や世論などのさまざまな側面を話し合った。グループで研究を完成させるという共通の目標があったために、この話し合いはとても活発なものだったと感じる。このような話し合いが、民主的文化能力の「文化的他者性や他者の信条・世界観・実践に対する開放的態度」、「市民意識」、「自己に関する知識と批判的な理解」、「世界に関する知識と批判的な理解」などのとても多くの民主的文化能力の育成に役立っていた。

さらにグループごとの研究という形式は、多様性の中で1つの目標に向かって進む上でのスキル育成にも大いに貢献している。特に日本において、異なるバックグラウンドを持つ生徒と一緒に1つのことに取り組むという機会はとても限られている。そのため、このフォーラムは特に「言語・コミュニケーション・複言語に関するスキル」、「協働のスキル」向上のための貴重な場となっただろう。

これ対し、このフォーラムには「自己効力感」育成の機会が少なかったように思われる。平和のために、このフォーラム自体が日米ないしは世界にどのような影響を与えるのか、また今もしくは将来、私たちに何ができるのかといったことに関して、具体的な案を出すといった機会が少し不足していたと感じる。それぞれのグループの発表でも、あるテーマに関しての現状把握や研究に関する内容の比率が高く、課題の克服のために私たちにできることについては十分に議論されていなかったように思われた。このフォーラムがどのような意義をもち、課題克服のために私たちには具体的に何ができるのかといったことについて、グループの垣根を越えて話し合うことのできる場があれば、フォーラム後の生徒のアクションにも、さらに繋がりがやすくなると思う。

<参考文献>

グラックキャロル. (2019). *戦争の記憶 コロンビア大学特別講義—学生との対話—* (1st ed.). 講談社.

フォーラムを通して学んだこと

1. 育成されたと思われる能力

- ・ 解釈の不一致に対する寛容さ・対立を解決するスキル

このフォーラムでの発表準備を通して、グループメンバーと少し意見が合わない時もあった。「もっとこれも入れたほうが良いと思う」という意見に対して、私は最初それが必要だとは思うことができなかった。しかし、時間をかけてその話題について全員で話し合っていくうちに全員が納得できる結論を導き出すことができたと考える。このような経験を通して、自分の意見と違うからと言ってすぐに排除してしまうのではなく、じっくりと時間をかけ話し合うことで合意に至ることができ、自分自身にとっても新しい視点を取り入れることができる良い機会になるということ学んだ。

- ・ 自立学習のスキル

私のグループでは発表の資料集めのため、東京都江東区にある教科書図書館というところに調査しに行った。たくさんの教科書があったが、自分が調査している内容を発表でどのようにしたら聞き手にわかりやすくデータを示すことができるかを考え、必要な資料をまとめることができた。この調査によって教科書に関する資料があるとは思ってもなかったが、日本、世界には様々なジャンルの資料館、図書館があることを知った。これから卒論のために調べる時にはこのような資料館を訪れるといいということも学んだ。

- ・ 分析的・批判的な思考のスキル

私は教科書を比較し、そこから見えてくる日米にはどのような違いがあり、それは何に起因しているのかについて考察した。最初、私たちの班は、この発表についてどのような結論が出せるのかというところでとても迷走していたように思う。特に日本の教科書、アメリカの教科書共に、そこまで大きく相手の国を批判したりという書かれ方はしていなかった。このような事実から平和教育に関してどのように考察するかがとても難しかった。この過程を通して様々な情報を判断し、考察を論理的に構成することができたのではないかと考える。

- ・ 柔軟性・適応力、他社の文化・信条・世界観・実践に対する開放的態度

私はアメリカの学生との交流が始まる前までは、私にこれらのスキルは十分に備わっていると考えるし、もしも文化の違いがあったとしても柔軟に自分の気持ちをコントロールし、対応することはできると考えていた。しかし、一度このようなことがあった。年が明けてからはほぼ毎週ミーティングをしていたのだが、前々から「次回のミーティングは何日の、何時からであってますか。」という連絡をしていたにもかかわらず（既読になっていたと記憶している）、当日になって今日は都合が良くないと伝えられたり、ミーティングをしようとして連絡しているにもかかわらずギリギリになるまで返信がもらえなかったりということがあった。時差があることもこのようなすれ違いの原因ではあったのかもしれないと考えるが、このような出来事があった時私は正直なところ苛つき、やっぱり外国の人は時間にルーズだなどとステレオタイプに当てはめて考えてしまっている自分がいることに気がついた。このような経験を通してやはり他者に対して開放的態度を持つことは簡単なことではないと考え直すとともに、自分はこのようなことがあった場合にステレオタイプに当てはめて考えてしまいやすく、これはよくないことであるから、これから他者との交流の機会がある際にはより気をつけてい区必要があるのだという視点を得ることができた。

2. 育成されたと考えられない能力

- ・ 言語・コミュニケーション・複言語に関するスキル

授業が始まる前は、アメリカの学生との交流ということで自分の英語力を試すことができる良い機会になると考えていた。しかし実際に始めてみると、自分は簡単なことしか英語で実践的に伝えることができず、自分が英語で話すことで限られたミーティングの時間が削られてしまうと思った。即座に自分の意見を英語にするという能力がまだ不足していたため、私たちのグループは考える時間が十分にあるインスタグラムでの連絡は100パーセント英語でやりとりしていたが、ミーティングでは、最初は英語で話すようにしていた日本側はだんだんとアメリカ側の日本語力に頼るようになっていった。リスニングのスキルは十分にあると感じたが、自分から英語で発信していく力が自分にはまだまだ不足していた。そして、今回のフォーラムでは自分を律することができず、相手側の日本語力に甘えてしまいせっかくのこの機会を生かすことができなかった。英語ができないがために、ミーティングでアメリカ側が話し合いを回してくれることに甘えてしまった。この点について私はとても反省している。

3. フォーラム全体の評価

私はこのフォーラムでどのようにして平和を構築していくかということについては様々な意見を聞くことができ、自分の考えも発展させることができた。

しかし、物足りなさを感じた点もある。日米の間にある歴史的な出来事はたくさんあり、今回私たちは特に「真珠湾攻撃」「原爆」についてテーマにし、話し合った。私たちの班が、教科書でどのようにこれらの出来事が描かれているかということに注目して研究を進めていく班だったのもあるのかもしれないのだが、アメリカの彼女たちが真珠湾攻撃や原爆についてアメリカの教科書で学んできて、それらについてどのような意見、考えを持っているのかについては話し合うことができなかった。発表時の質疑応答でも個人的な意見というよりも社会、制度、政府など大きな枠組みをどう考えるかという点がほとんどだったように思う。平和教育を考えるのであれば、社会の構造について考える前に、自分たちの事例からもっと深く考えることも必要なのではないかと考える。

フォーラム修了レポート

1. 育成されたと思われる能力

フォーラムを通し、まず、共感 (Empathy) を身につけられたと考える。私はこの授業を受ける前までは、日本の戦争のことしか知らず、日本は第二次世界大戦の被害者側だと考えていた。特に、広島や長崎の原爆についてはアメリカが一方向的に悪いと考えており、今思うと、とても偏見的な考えを持っていたと思う。しかし、フォーラムや特別講演、事前授業を通し、日本だけではなく、アメリカや中国、ドイツなど様々な国の視点から戦争について学ぶことができ、日本は第二次世界大戦の加害者と被害者の両方の側面を持つことを知ることができた。また、国によって戦争の伝えられ方が大きく異なり、1つの視点で語ることに困難なため、戦争は様々な国の視点で中立的に分析しなくてはならないことを学ぶことができた。

次に、協働のスキル (Co-operation skills) を身につけることができたと考える。私はディスカッションやグループワークに対して苦手意識を持っていたため、今まで、ディスカッションやグループワークがある講義はできるだけ避けるようにしていた。しかし、大学3年生になり、就活を進める中で、他の人と協力するスキルは重要だと感じ、この授業を履修することを決めた。最初は、グループメンバーとうまくやっていたか不安だったが、グループメンバーが私の意見や考えについて熱心に耳を傾けてくれ、うまく言語化できないときも、フォローをしてくれたため、発言量を増やすことができた。また、今までは教職の授業などでグループワークがあったとしても、リーダー的な役割を果たすことは到底出来なかったが、今回は、ミーティングや予行練習をするように積極的にグループメンバーに働きかけたり、他のグループメンバーの発表内容についてアドバイスをしたりするなど、目標達成のために他者に協働を促すスキルを発揮できたと思う。

最後に、柔軟性・適応力も育成することができたと感じている。私のグループのテーマは「戦争と人権」だったが、私は最初、特攻隊の人権について発表しようと考えており、靖国神社へ訪れたり、元特攻隊だった人々の証言を調べたりしていた。しかし、特攻隊について調べているうちに、加害者側の視点から人権について発表しようとする、「犯罪者や戦争に加担した人には人権があるのかどうか」という複雑な議論になってしまうと感じた。そこで、私は加害者側ではなく、被害者側の視点に注目することにした。被害者側で言うと、慰安婦や日系アメリカ人、ナチスに迫害されたユダヤ人などを思い浮かべたが、これらの内容について既に調べているメンバーがいたため、私は思考を変え、障害者の権利について調べることにした。第二次世界大戦中の障害者に関する情報は限られていたが、日本とドイツの障害者の状況を比較するなどの工夫をし、発表することができた。

2. 育成されなかったと思われる能力

今回のフォーラムを通して、まず、「解釈の不一致に対する寛容さ」は残念ながら育成出来なかったと考える。私のグループのテーマは「人権と戦争」だったが、グループメンバーがそれぞれ違う国の社会的弱者についてリサーチをしたため、解釈の不一致が生じなかった。例えば、慰安婦問題について、日本、中国側などの立場についてディスカッションすれば、解釈の不一致が生じ、今後、日本とアジアの国々がどのように慰安婦問題を解決していけばいいのか考えることにつながったと思う。次に、「言語・コミュニケーション・複言語に関するスキル」も育成できなかったと思う。ディスカッションなどでは私自身、日本語で話す機会が多く、日本語のコミュニケーション能力を向上させることはできたと考えるが、英語で話す機会が少なく、フォーラムの最終日に英語で意見を求められた時に上手く自分の意見を言うことができなかった。最後に、「分析的・批判的な思考のスキル」を育成することができなかったと考える。私たちのグループは様々な社会的弱者について調べたが、それぞれが調べた内容に統一感がなかったため、グループ全体の結論を考えるのが難しかった。フォーラム前に、グループで結論についてディスカッションしようとしたが、グループメンバーの予定がなかなかつかず、十分に考えることができなかった。そのため、フォーラムでグループの結論について聞かれた際に、上手く答えることができなかった。

3. フォーラム全体の評価

フォーラム全体について、育成に寄与できた部分は、フォーラム参加者に第二次世界大戦時障害者について知ってもらうことができたところだと考える。私は第二次世界大戦時のドイツと日本の障害者について発表した。フォーラム最終日に、戦時中の障害者について初めて知り、障害者の権利について考えることができたと言っていた参加者が何名かいた。また、私は障害者の権利につ

いて発表した際、優生思想についても触れた。発表後の全体のディスカッションで、優生思想について意見を述べていた参加者がおり、参加者の優生思想に対する考えを深めることができたのではないかと考える。

フォーラム修了レポート

1. 育成されたと思われる能力

- ・人間の尊厳と権利の尊重(Valuing human dignity and human rights)：全ての人間が平等な価値、尊厳、尊敬を受ける権利を有し、あらゆる人権と基本的自由の権利を同等に有しており、そのように扱われなければならないという価値づけ

私たちのプレゼンテーマ「戦争と人権」では、戦時中に弱い立場に置かれた人の人権について調査し発表した。教育課程の歴史の授業で戦争について学ぶときは、当時その国を率いていた権力者が注目され、学ぶことが多い。しかし、戦争によって犠牲になる多くの人は弱い立場に置かれていた人々であり、そのような人々は当時価値が低く尊厳のある人とされる権利がない人間としてみなされていたことを知り、あらゆる人間は国籍や立場に関わらず、尊厳と権利が尊重されるべきだという思いが高まった。

- ・共感(Empathy)：他者の考え、信念、感情を理解し、他者の視点から世界を見られるスキル。

日本とアメリカの教科書比較のプレゼンでは、今まで自分が受けてきた教育とは異なる教科書や教育を知ることができた。アメリカの教科書を自分が学んできたこととは違うからという理由で遠ざけることなく、自分とは異なる視点からも物事を見て受け入れることができていた。

2. 育成されたと考えられない能力

- ・自己効力感(Self-efficacy)：目標達成に必要な行動を起こす自身の能力に自信を持ち、問題を理解し適切な方法を選択し、障害を克服し、世界を変革できるという確信を持つこと。

世界で起こっている問題を調べ、理解したつもりだったが、問題があまりにも壮大に感じてしまい、自分や個人でできることを考えることに難しさを感じてしまった。問題解決のためにやらなければならないことはたくさんあり、それぞれが複雑に絡み合っているが、たとえ地道で小さいことでもその中から個人でできること、優先順位の高いものを探し実践することが重要なのだと感じた。

- ・言語・コミュニケーション・複言語に関するスキル(Linguistic, communicative and plurilingual skills)：同じ／異なる言語話者と適切にコミュニケーションしたり、仲介者として行動できるスキル。

今回のフォーラムのグループ活動では、グループのバツサー大学のメンバーが日本語が非常に堪能だったこともあり、グループ内の討論をほとんど日本語に頼り進めてしまった。時折、バツサーのメンバーに日本語では伝わらないこともあったが、それを自分で英語で伝えようとしたが、もう一人の日本語が堪能なメンバーが英語に訳して伝えてくれ、自分が英語を使う機会があまりなかったと振り返る。グループ討論で基本的に使用する言語が日本語になってしまっていたので、最初の顔合わせから積極的に英語を使って話せば良かったと思った。

3. フォーラム全体の評価

フォーラム全体として、自分自身への自戒も含めるが、グループ発表に対する質問やコメントがもっと活発に交わされると、より深い討論になったのではないかと感じた。グループ発表に関しては、どのグループもグループ内で深い議論をしたうえで詳しくわかりやすいプレゼンであったという感想を持った。

平和教育を題材としたフォーラムでの民主的文化能力の育成

1. 育成されたと思われる能力

本年度のフォーラムと事前学習を通し育成できたと考える能力として、「文化的他者性や他者の信条・世界観・実践に対する開放的態度」、「言語・コミュニケーション・複言語に関するスキル」、「自己に関する知識と批判的な理解」の三つを挙げたい。

第一に、「文化的他者性や他者の信条・世界観・実践に対する開放的態度」は、平和教育というセンシティブな題材だからこそ育成できた能力だと考えている。平和や戦争に関するトピックというのは、日米という関係ゆえに自国の加害者性や被害者性に目を向けなければならないという点で、自身のナショナルアイデンティティや愛国心が揺らぐ可能性を孕んでいるものだと考える。そのようなテーマで互いの経験や平和教育の現状について扱う中で、文化的帰属の異なる他者の見方を自身の経験や信条と異なるからと排除するのではなく、敬意を持ち積極的な態度で対話に臨むことが不可欠であると身をもって学んだ。

第二に、「言語・コミュニケーション・複言語に関するスキル」は特にフォーラムの発表の場で育成できたと感じている能力である。私は英語でのスピーキング能力が乏しく、発表準備段階の議論等ではチャットを用いて補足したりどちらの言語も堪能な学生に仲介してもらったりすることが多く言語の壁を超えた対話に限界を感じることもあったが、フォーラムの発表後の質疑応答では英語の質問には必ず英語で答えるよう努めた。自身の拙い英語力で質問に答えることは改めて難しく言葉に詰まることもあったが、正しい英語を話すというよりも相手に伝わるようにとにかく口に出してみるよう努力した。本授業を通して語学力では自身の未熟さを感じることはばかりで未だ改善すべき部分が多いが、フォーラム当日にかけて、伝えたいことを自分の言葉で表現しコミュニケーションを取るという観点では成長することができた。低いハードルを超えただけではあるものの、同じ/異なる言語話者との言葉でのコミュニケーションに対する苦手意識をフォーラムの場で克服できたことは自分にとって重要だったと考えている。

第三の能力は、「自己に関する知識と批判的な理解」である。発表においては平和教育についての学生の経験や日米の平和教育の展望に焦点を当てたが、自身の経験が先入観や信念を形成しているトピックだからこそ、他者との対話の中で異なる考え方や出会った場合には、自身の考えを批判的に見つめ直すことが大変重要であったと考えている。日米の平和教育の比較や平和教育のプロジェクトの提案にあたり、平和教育の機会そのものが乏しいアメリカで平和教育を普及させることのみならず目を向けることは、日本の平和教育が行われているという現状を無批判に持ち上げることには繋がりにくい。本フォーラムを通し、「アメリカには平和教育がないからアメリカの子どもたちに日本の子どもたちと同じように平和学習の機会を与える」という自国中心の考え方を脱することができたという点で、この能力を育てることができたと考えている。

2. 育成されたと考えられない能力

本フォーラムを通して育成することが難しかった能力は、「自己効力感」、「協働のスキル」、「リスニング・観察のスキル」である。第一に、「自己効力感」についてだが、学生という立場でも戦争や平和について対話し解決策を探ることができるという点に関しては自己効力感を抱くことができた。平和教育について興味関心を持っていながらもこのようなトピックがタブーであるという意識を持っていたことを乗り越え、他者と対話し行動を起こすことの重要性を実感できた一方で、ロシアとウクライナで戦争が起こっており戦地の人々の映像を日々ニュースで目にする中で、自分自身が世界に変化をもたらすことが可能だという自己効力感を持つことの難しさも同時に感じた。フォーラムまでの事前学習や意見交換を通して、戦争のようなセンシティブな問題も対話によって解決できると考えていたものの、それは第二次世界大戦という歴史に対して抱いていた考えであった部分も否定できない。現在進行形の問題に対して自分自身の能力に肯定的信念を持つことは私にとっては困難であったと言わざるを得ない。

第二に、「協働のスキル」に関して、アメリカの学生とのグループとしての活動には反省しなければならない点が多い。オンラインでの実施という条件で、共同作業でスライド作成や台本作成を行うことが困難だったことや、WhatsAppなどのツールで密に連絡を取ることができなかったことが主である。時差の影響で作業時間を同じにしづらかったことやSNSで連絡しても既読がつかないこともあり、話し合いの場で齟齬が生じてしまうことがあった。また、スケジュール上、フォーラムと同時刻にミーティングを行うことが多かったが、アメリカは夜のため長時間の会議はできないこともあって日本とアメリカで進捗状況に偏りが生まれてしまった。これは互いに連絡を頻繁に取りフォロ

ーし合うなどの手段によって自ら改善しなければならなかった点であった。

第三に、「リスニング・観察のスキル」は、オンライン開催であることもあり育成するのが特に難しいスキルであった。フォーラムの質疑応答では紹介した先行研究について反論を述べていただいたが、それに対する自分自身の意見を述べることに注力してしまい他者の考えに耳を傾けるということを重要視できていなかったのは改善点である。

3. フォーラム全体の評価

育成に寄与できていた点としては「言語・コミュニケーション・複言語に関するスキル」がある。日本語と英語双方を使用したプレゼンテーションは一方向的に教わる/教えるという立場ではなく、双方向のコミュニケーションを生み出す構図となっている。これはこのスキルの育成に大きく寄与していた点だと考える。

しかし、「協働のスキル」育成には寄与できていなかったと感じた。学生の都合でフォーラム直前に発表日程が再三にわたり変更されたことや発表当日に司会者が出てこず自分たちで進行しなくてはならなかったことは、本授業の受講生をひとつのチームとして見た場合、他者との協働への積極的参加という姿勢とは正反対である。それらを発表のグループ内で協力して乗り越えたこと自体は力にはなったものの、直前の変更やイレギュラーで負担を増やすことやそれを容認することは協働のスキルの育成に寄与するという概念とは相対すると感じる。来年度以降は、バディやグループの協働だけでなく、本フォーラムの参加者全体での協働も重視するよう改善されることを期待している。

国際学生フォーラムに参加して

1. 育成されたと思われる能力

私が今回のフォーラムを通して自分自身が育成できたと思う能力は主に3つある。一番育成することができたスキルは、(C7) 協働のスキル である。私たちのグループでは、言語能力が不十分であることにより、前半に行った授業内外のミーティング内での理解の齟齬があった。具体的には、口頭で決定した先行調査の分担や次回ミーティング日程の時間が時差などの関係で理解不十分であった。そのため、発表資料作成に入る段階では、それぞれの学生の先行調査や話の方向性の理解に齟齬が生じ、発表資料作成の進捗が芳しくなかった。このことに対して、私はそれぞれの分担箇所を各自が責任を持って行うことができているが、その部分も自分が補填することによって、どうにか発表資料を作成すれば良いと考えていた。しかし、確実に全員で話し合っただけでは足りない部分があったことや、個人での補填にも限度があったことで、やはりそれぞれの分担の確認を行い進めることが懸命であると考えられるようになった。それぞれの分担を確認したり、話し合いを進めるために、SNSを使用して分担を確認し、割り振りができていない部分は再度分配し直すことで、それぞれの分担に責任を持って準備を進めることができるようになった。そして、発表準備の進みが順調ではない担当に関しては、個人的に連絡をとることによって、発表当日に納得できる発表を行うことができた。このような経験を通して、言語やこれまでのバックグラウンドの異なる人との協働は、理解の困難さや煩雑さがあるものの、方法を変更したり工夫することによって、協働できるスキルが身についたと考える。

二つ目に私が育成できたと考える能力は、(C1) 自律学習のスキル である。先行調査を行うにあたり、私たちのグループは各自分担して調べた。本来であれば分担した部分の先行研究を調べるだけの予定であった。しかし、それまでの授業での話し合いの際に、自分の真珠湾攻撃に対する知識の少なさや、自分知らない既存の日本の平和教育があることを自覚した。そのため、先行調査の分担とは別に自分で真珠湾攻撃についての資料を探したり、日本にある平和教育を行なっている施設を訪れた。このように自律学習することができたのは、フォーラムの事前授業で自分の知識が十分ではないことを自覚することができたからであると考えられる。ただの講義として知識を得るだけではなく、アメリカの学生と共に講義を受けることによって、自分の未知であることが日本側の視点に偏っているということを現実的に感じることで、その結果自律学習のモチベーションに繋がったと考える。

3つ目に (D1) 自己に関する知識と批判的な理解 が育成されたと考える。私たちのグループでは平和教育について扱ったが、アメリカ側の学生の平和教育の経験がとても少なかった。そのため、グループでの話し合いでは平和教育の不十分なアメリカに充実した日本の平和教育を取り入れる必要があるのではないかという意見がアメリカの学生からも出てきた。その話し合いの結果、アメリカの学生に向けた平和教育の提案や、日本とアメリカの資料館の展示の交換の提案が行われた。これは、アメリカの学生はアメリカの知識への批判的な理解が行われているが、日本側の学生の自己知識への批判的な理解とはいえない。しかし、フォーラムでの発表で他のグループの発表を聞き、私の日本の平和教育への批判的な理解が育成されたと考える。私たちのグループでは盲目的に日本の平和に関する資料館の内容が良質な平和教育を行なっていると考えていたが、他のグループでは日本の資料館での平和教育も日本のナショナリティ育成に偏ってしまっているという指摘を行っていた。このように他のグループの発表と自分たちの発表の内容を比べることによって、さまざまな視点からの見解を理解することができ、結果的に自己に関する知識と批判的な理解が培われたと考える。

2. 育成されたと考えられない能力

私が今回のフォーラムを通して自分自身が育成できなかったと思う能力は主に2つある。一つ目は、(A3) 民主主義、正義、公正、平等、法の支配に対する価値観 である。この価値観が育成できなかったと考えるのは、この価値観に対する私自身の考えの大きな変化が感じられなかったからだ。これまでの受けてきた様々な大学の講義から、国の異なる学生同士で対話を行ったり、一つの国家の対立の問題に関して多様な視点からアプローチすることの大切さを学習した。そのため、今回のフォーラムによって大きく変化した価値観ではないと考える。また、私が平和教育という広い枠組みの中で民主的プロセスを明確に区切ることができなかったため、民主的プロセスがいかに大切であるかという点についての認識の変化はなかったと考える。

二つ目は、(B5) 自己効力感 である。私はこのフォーラムを通して自己効力感が向上したとは考えない。理由は二つあると考える。一つ目は、私たちはグループでの研究のまとめにより良い平和教育の方法を提案したが、その提案した内容の主体についてはあまり考えることができなかったからだ。より良い平和教育を行うために私たちが行動するという自己効力ではなく、大きなシステムとしての主体を

想定して提案を作成したため、学生としての自己効力感が生まれたとは考え難い。二つ目は、グループやフォーラム全体での話し合いを通じて、互いに理解することが可能であるという自己効力感は生まれたが、対立している国家間での理解につながるという自己効力感は生まれなかった。フォーラム開催のタイミングでウクライナとロシアの情勢が悪化し、私はフォーラムで話し合っていることが本当に国家間の理解につながるという自己効力感があまり感じられなかった。このような理由から、フォーラムを通じて期待されていた程度の自己効力感は育成されなかったと考える。

3. フォーラム全体の評価

フォーラム全体として大きく育成に寄与していたのは、(C6) 言語・コミュニケーション・複言語に関するスキルであると考えられる。このフォーラムでは事前講義や発表で異なる言語話者とコミュニケーションを取ったり、仲介者として複言語を使用する場面が多かった。講師の先生方も相手に関わらず様々な言語で質疑応答を行うため、全ての学生が日本語と英語のどちらも理解する必要があった。また、司会者も英語と日本語のどちらも話すことによって、仲介者としてのコミュニケーションスキルも向上したのではないかと考える。そのほかにも、発表原稿をそれぞれ学生が交換して確認することによって、必然的に複言語スキルが向上したと考える。一方で、司会者の複言語スキルに関しては、全てのグループに統一されたものではなかったと考える。ヴァッサーとお茶大のどちらからもグループで一人ずつ司会者を行い、それぞれ日本の学生は英語でアメリカの学生は日本語で司会をすることになっていたが、実際は全グループが規定通りに司会者を選出していなかったため、仲介者としてのコミュニケーションスキルの向上のためには、司会者の規定の改善が必要であると考えられる。

フォーラム全体で寄与できていなかった部分としては、(C8) 対立を解決するスキルであると考えられる。なぜなら、このフォーラム全体で共通した対立が考えられていなかったからだ。アメリカと日本で対立する内容としては、真珠湾攻撃や原爆の歴史的内容と現在の認識が挙げられるが、全てのグループがその対立ないように触れた発表を行なっていなかった。そのため、平和教育として広い枠組みで対立を解消するという事は考えることができたが、原因を追求し全員の納得する解決策を見出すという段階までは話し合うことができていなかった。このような結果の原因になったのは、フォーラムの内容が平和教育という広く抽象的なトピックで、何を目的とするかについて詳細で共通した決定がなかったからであると考えられる。改善策として、全てのグループが最終的に何を成果として発表する必要があるのかを初めに決めておくことが必要であると考えた。

成果分析

間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム 民主的文化のための能力の参照枠を尺度として

森山新

1. 評価の尺度について

第11回国際学生フォーラムで教育、及び評価の尺度に用いた「民主的文化のための能力の参照枠 (Reference Framework of Competence for Democratic Culture: RFCDC)」とは、2016年、欧州評議会が提示したものである (Barrett, 2016)。この RFCDC は、欧州市民が、平和や人権、民主主義、法の支配を擁護し促進するための対話や行動を起こしたり、民主的文化に参加したり、文化的に多様な社会で他者と共に平和に暮らす際に必要な様々な能力を提供することをめざし、策定されたものである。

今回の第11回フォーラムではこの参照枠を活用し、間文化的シティズンシップ教育としてこのフォーラムが有効に機能しているかを評価することにした。それは今回のフォーラムが日米間でコンフリクトを内包するセンシティブな問題をテーマに扱うため、対話を実現するためには日米の参加者が「民主的文化のための能力」を最大限発揮する必要があると考えたからである。

この枠組みでは、我々が民主的文化のための能力として、「価値づけ (Values)」、「態度 (Attitudes)」、「スキル (Skills)」、「知識とクリティカルな理解 (Knowledge and critical understanding)」の4つのカテゴリーの、合わせて20の能力を提示している。

表1はそれら4つのカテゴリー、20の能力を表したものである。

表1 民主的文化のための20の能力

A 価値づけ	B 態度
A1 人間の尊厳と権利 A2 文化的多様性 A3 民主主義・正義・公正・平等・法の支配	B1 開放的態度 B2 敬意 B3 市民意識 B4 責任(感) B5 自己効力感 B6 解釈の不一致への寛容さ
C スキル	D 知識と批判的理解
C1 自律学習 C2 分析的・批判的思考 C3 リスニング・観察 C4 共感 C5 柔軟性・適応力 C6 言語・コミュニケーション・複言語 C7 協働のスキル C8 対立の解決のスキル	D1 自己に関する知識と批判的理解 D2 言語・コミュニケーションに関する知識と批判的理解 D3 世界に関する知識と批判的理解

注) Barrett (2016) をもとに筆者が和訳した。

第一の「価値づけ」は、人権、多様性、民主主義、法の支配、そして平和など、民主的文化にとって必要な概念の重要性を理解する能力である。

第二の「態度」では、心を開き、相手に敬意を持ち、自らが責任感や当事者意識を持ち、忍耐強く対話を続け、達成する態度を指す。

第三の「スキル」では、自ら進んで学び、クリティカルに考え、相手の声に耳を傾け共感し、言語スキルや柔軟な思考力を活用し、協力して問題を解決するスキルを指している。

第四の「知識とクリティカルな理解」では、自分に対し、言語やコミュニケーションに対し、トピックに関し、知識を得て、クリティカルに理解する能力である。

2. 調査方法

調査は最初の授業である 10 月 21 日に事前調査、フォーラムが終わった後に事後調査が行われた。事前調査に先立ち、「民主的文化のための能力」とはどのようなものかについて、森山（2021）を参考に説明した。調査は 20 の各能力について、日本側の学生 9 名に、「あなたの現時点での能力がどの程度か」を、0（低評価）～4（高評価）の 5 段階で評価してもらった。分析は IBM SPSS Statistics ver.27 を用い、事前、事後の評価値を対応のある t 検定にかけ、5%水準で有意差があるか、効果量はどの程度かを見た。効果量は念のため Cohen の d 、及び Hedges の g の両方を算出したが、ほぼ同一の数値であったため以下では前者のみ示す。効果サイズの推定では、標準化基準の推定に「差の不偏標準偏差」を用いた。

3. 調査結果及び考察

4.1 量的分析結果

表 2 は 20 の各能力の事前・事後の数値の標本平均値 M_1 、 M_2 と標準偏差 S_1 、 S_2 、標本平均値の差 M_2-M_1 、有意差の有無、及び効果量を示したもので、図 1 は効果量をグラフ化したものである。

表 2 各能力の事前・事後の変化

	A1 人権	A2 多様性	A3 民主主義	B1 開放的態度	B2 敬意	B3 市民意識	B4 責任感	B5 自己効力感	B6 寛容さ	C1 自律学習
M_1	2.78	3.00	2.33	2.44	3.00	1.78	2.33	1.33	2.44	2.22
S_1	.667	.500	.707	.882	.500	.972	.707	.707	1.130	.833
M_2	3.89	3.78	3.56	3.44	3.56	3.22	3.33	2.56	3.11	3.00
S_2	.333	.441	.527	.527	.527	.667	.707	.726	.782	.707
M_2-M_1	1.11	.78	1.23	1.00	.56	1.44	1.00	1.23	.67	.78
p 値	0.003	0.023	0.010	0.040	0.051	0.001	0.028	0.005	0.141	0.008
Cohen's d	2.132	1.652	1.975	1.404	1.081	1.684	1.414	1.705	.680	.995

	C2 批判力	C3 聞く	C4 共感性	C5 柔軟性	C6 言語解決	C7 協働	C8 対立	D1 自己理解	D2 言語理解	D3 世界理解
M_1	2.11	2.44	2.56	1.89	1.67	2.11	1.67	2.33	2.11	2.11
S_1	.928	.527	.726	.928	.707	1.054	.866	.500	.601	.782
M_2	3.11	3.11	3.44	3.11	2.67	2.89	2.89	3.00	3.00	3.11
S_2	.782	.601	.726	.928	.707	.782	.928	.500	.707	.601
M_2-M_1	1.00	.67	.88	1.32	1.00	.78	1.22	.67	.89	1.00
p 値	0.067	0.004	0.035	0.005	0.028	0.111	<0.001	0.004	0.021	0.009
Cohen's d	1.168	1.172	1.224	1.317	1.414	.838	1.357	1.333	1.355	1.427

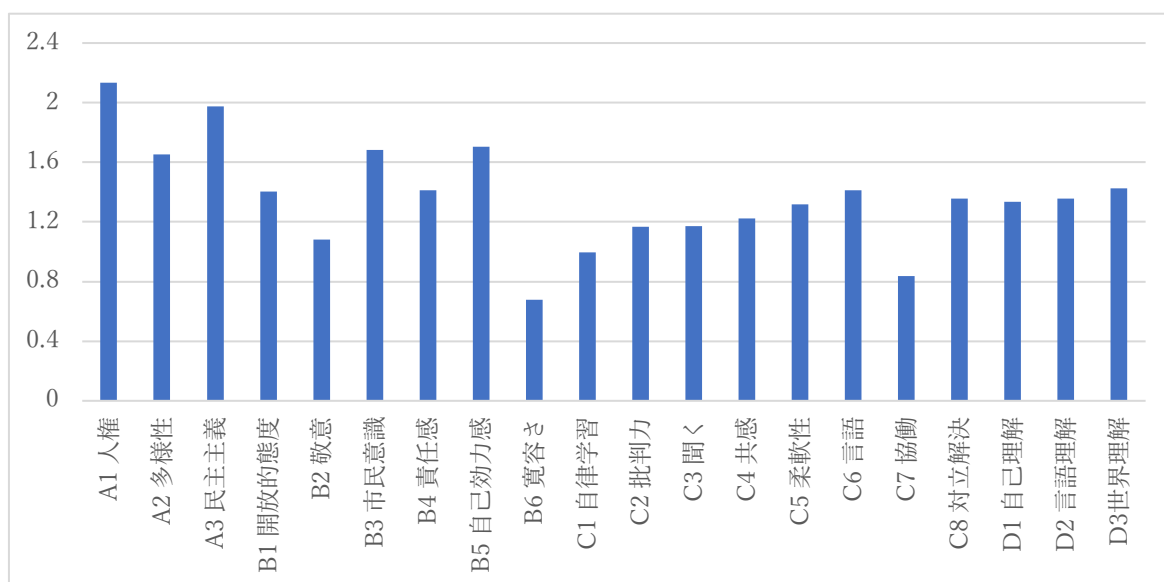


図1 各能力の効果量 (Cohen's d)

その結果、20の能力のうち、B2（敬意）、B6（解釈の不一致に対する寛容さ）、C2（分析・批判力）、C7（協働のスキル）の4つを除く16のCDCで事前、事後に有意な差 ($p<.05$) が見られた。参加者が9名と少なかったにもかかわらず、多くの項目で有意差が出たのは、本フォーラムがCDC向上に大きく寄与していたことを示している。ほとんどで有意差が出る中、4つについて有意差が出なかったのは、B2では事前の平均値 M_1 が3.00と高かったために M_2-M_1 が0.56と小さかったこと、B6では標準偏差 S_1 が1.130と極めて高い一方で M_2-M_1 が0.67と低かったこと、C2では標準偏差 S_1 が0.928、C7では標準偏差 S_1 が1.054と極めて高く参加者間のばらつきが大きかったことが原因と思われる。なお標準偏差は事前と事後の2つがあるが、介入（フォーラム実施）前の方が介入により歪められていないことから、適切に分散が説明できると考え事前の標準偏差 S_1 を用いた（大久保・岡田, 2012, p.65）。

また、効果量 (Cohen's d) では、B6 (寛容さ) が 0.680 で大きい評価量 0.8 を下回ったものの、それ以外の 19 の能力で大きい効果量 0.8 を上回っていた。中でも「A 価値づけ」では「A1 (人権に対する価値づけ)」、「A2 (多様性に対する価値づけ)」、「A3 (法と民主主義に対する価値づけ)」のいずれもが、「B 態度」では「B3 (市民意識)」、「B5 (自己効力感)」が 1.5 を上回った。その他「B 態度」の「B1 (開放的態度)」、「B4 (責任感)」、「C スキル」の「C4 (共感)」、「C5 (柔軟性・適応力)」、「C6 (言語・コミュニケーション・複言語)」、「C8 (対立を解決するスキル)」、「D 知識と批判的理解」では「D1 (自己に関する知識と批判的理解)」、「D2 (言語・コミュニケーションに関する知識と批判的理解)」、「D3 (世界に関する知識と批判的理解)」のどれもが 1.2 を上回っており、かなり大きい効果を示していた。

以上の結果から、本フォーラムでは、参加者は 9 名と少なかったものの、そのほとんどで事前、事後の数値に有意差が出ており、しかもほとんどで大きい効果量を持っているため、民主的文化のための 20 の能力向上に効果が見られた。

4. 結論

以上の結果から、本フォーラムでは、参加者は 9 名と有意差検定には人数が少なかったものの、そのほとんどで事前、事後の数値に有意な差が出ており、しかもほとんどで中から大の効果量を持っているため、民主的文化のための 20 の能力のほとんど全てにおいて能力向上の効果が見られたと言ってもよいであろう。今回のフォーラムでは日米両国が互いに敵対関係にあった第二次世界大戦を取り上げ、日米両国の平和教育を問い直した。そこには 20 の民主的文化のための能力はどれも欠くことができないが、中でも効果量が高かった項目はこのセンシティブなテーマに関し、置かれた立場や受けてきた教育を異にし、かつ母語が異なる日米の学生が対話により解決をめざす上で非常に重要な能力である。「市民意識 (B3)」は学生一人ひとりが前世紀の戦争を自らの問題と位置づける、すなわち当事者意識を持つために必要であり、これまで自分が受けてきた平和教育、歴史教育について、「分析力・批判力」(C2) を持って見つめ直し、「柔軟性・適応性」(C5) を発揮し、容易に意見の一致が見られなくとも、そうした「解釈の不一致を寛容に受け止める態度」(B6) と「対立を解決するスキル」(C8) を持って辛抱強く取り組む姿勢が必要となる。さらに発表に向けた準備は授業外で日米の学生たちが自律的に行われることから、「自律学習のスキル」(C1) や「協働のスキル」(C7) も求められよう。

以上、簡単ではあるが、事前・事後の民主的文化のための能力の自己評価の変化から、民主的文化のための能力の向上を分析し、本フォーラムが間文化的シティズンシップ教育として有効に機能しているかを考察した。その結果、本フォーラムは民主的文化のための能力向上に寄与しており、間文化的シティズンシップ教育として有効であることが確認できた。

参考文献

Barrett, M. D. (2016). *Competences for democratic culture: Living together as equals in culturally diverse democratic societies*. Council of Europe Publishing.

森山新 (2021) 「間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析 -民主的文化のための能力の参照枠 (RFCDC) の観点から-」 『人文科学研究』 17, 25-38.

大久保街亜・岡田謙介 (2012) 『伝えるための心理統計：効果量・信頼区間・検定力』, 東京：勁草書房.

編集後記

時を同じくして2月24日にロシアの一方的な侵略により始まったウクライナでの紛争のさなか、「平和教育を見つめ直す」をテーマに、第二次世界大戦下の日米関係を考える第11回国際学生フォーラムが無事終わった。学生たちは、戦争というものが遠い過去のものではなく、今まさに起きている問題として捉え、戦争を終わらせ、平和を維持するために、学生として何ができるかを真剣に考える貴重な機会となった。

また、このフォーラムは近年、超国家的視点からのシティズンシップ教育をめざしているが、このように渡航が全面的に制限され、開催が危ぶまれる中、オンラインで開催にこぎつけ、かつ大きな成功を収めたこと自体が、高等教育機関に学ぶ学生として、また教員として、COVID-19を克服するための重要なアクションであったと考えている。

両校の参加学生は発表や討論、交流の中で、様々な学びや気づきを得ているようであった。また自身が学ぶ学習言語を積極的に使い、プレゼンテーションやディスカッションのツールとして活用し討論し結論を導き出した。そしてその結果として、自身のできることを考え、今後の自身の行動の指針としており、シティズンシップ教育としてのフォーラムの意義も達成できたものと考えている。

世界がグローバルになればなるほど、引き起こされる問題もグローバルなものとなる。国境を越えた人々の移動は、これまた国境を越えた感染の拡大により阻まれている。こうした問題を解決するためには、国境を超えて学生たちが集い、学び、解決をめざすことがますます重要になる。今回はオンラインでそのような場を設定し、困難を克服した。好まざるグローバル化と求められるグローバル化とがぶつかり、克服した瞬間だった。

国際学生フォーラムは二回り目に入ったが、今後もこうした機会が未来を担う若き学生たちに豊富に提供できればと思う。

(森山)

第11回国際学生フォーラム報告書

発行日：2022年3月31日発行

発行：お茶の水女子大学国際教育センター・グローバル文化学環

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

発行協力：ヴァッサー大学

編集：森山新

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 文教1号館101-4

E-mail moriyama.shin@ocha.ac.jp